

フォークソングの情景遍路

－ 東京の川、坂、駅、そして橋 －

Pilgrimage for the Scenery of Folk Songs: Rivers, Slopes, Stations, and Bridges in Tokyo

伊藤 寛幸*

ITO, Hiroyuki

*北海商科大学

歌中の舞台を訪問する観光行動をコンテンツツーリズムと称する。コンテンツツーリズムにおける観光行動の動機は作品への憧憬であり、歌の舞台は鑑賞者にとってはまさに聖地である。

「ご当地ソング」の舞台への訪問、すなわち聖地巡礼は観光振興の大きな推進力となる。本稿では、フォークソングに謳われている東京の情景としての、川、坂、駅、橋を巡った紀行を紹介し、ご当地ソングの観光資源化を再考するうえでの契機としたい。

キーワード：コンテンツツーリズム、フォークソング、向都離村

1 はじめに

テレビドラマ、映画、小説、歌などの舞台を訪問する観光行動をコンテンツツーリズムと称する。そのコンテンツの内容は、視聴者、鑑賞者、読者にとって、自己の世界観を広げる選好対象となる。特に、歌については、以前より「ご当地ソング」と称する分野が確立しており、歌は映像メディア同様に、歌詞への自己投影によって、共感や感情移入を生む魅力あるコンテンツのひとつである。コンテンツツーリズムにおける観光行動の動機は作品への憧憬であり、聖地巡礼なる用語が術語として扱われている昨今、歌の舞台は鑑賞者にとっては、まさに聖地である。そして、コンテンツツーリズムによる外部経済は、いまや経済効果として他産業にまで広く波及することが認識されており、「ご当地ソング」の舞台である地元への訪問、すなわち聖地巡礼は、観光振興の大きな推進力となる。歌は世につれ世は歌につれという。ここで世を世代と読む場合、「団塊の世代」という呼称が顕すように、大きな塊となっている世代が世間に与えてきた影響は大きい（注1）。特に、「団塊の世代」が二十歳前後の1960年代後半から1970年代にかけて、彼らは、しばしば全共闘世代という括りに囚われることとなる（注2）。その世相は彼らを取り巻く歌にも強く反映された。既成の概念にとらわれない戦後世代が生み育んだ音楽のジャンルのひとつにフォークソング（注3）がある。彼らがフォークソングを生んだのか、フォークソングが彼らを育んできたのか、歌は世の趣向につれて変化し世のありようも歌の好尚に影響されることから、「団塊の世代」と「1970年代のフォークソング」の関係性は深い（注4）。関連研究には、増淵（2007）、村木（2012）などがある。増淵（2007）は、ポップカルチャを中心に音楽産業と地域文化政策の関係性についてご当地ソングを事例に論じている。村木（2012）は、アイドルファンの活動を分析し、特に旅行行動をとともなう活動をコンテンツツーリズムの枠組みのなかで考察している。ご当地ソング研究やアイドルを軸としたコンテンツツーリズム研究は存在するが、東京を舞台にご当地ソングとしてのフォークソングを対象としたコンテンツツーリズム研究を発見することはできなかった。

表1 遍路の対象としての楽曲

曲名	作詞	作曲	編曲	歌唱	リリース
神田川	喜多條忠	南こうせつ		南こうせつとかぐや姫	1973年
無縁坂	さだまさし	さだまさし		グレープ	1975年
池上線	佐藤順英	西島三重子	馬飼野俊一	西島三重子	1976年
面影橋	天野滋	天野滋		N.S.P	1979年

注1) ジャパン・ミュージックワークス (n.d.) を参考に作成。

こうした背景をうけて、本稿では、フォークソングに謳われている東京の場景としての、川、坂、駅（注5）、橋を巡った紀行を紹介する。“青春が甦る”など感傷に浸るものではない。街の変遷をたどり、当時の“情景”を探し求め、ご当地ソングに描かれている“場景”を観光資源として遺しコンテンツツーリズムを確立させる契機としたい。

2 データと方法

2.1 対象の限定と概要

ご当地ソングを対象にコンテンツツーリズムを論ずるにあたり、音楽のジャンルを定義・限定しなければならない。しかし、歌および唄のジャンルは多岐にわたる。本稿が扱うフォークソングについても1980年代以降、ニューミュージック（注6）と称されるなど、その呼称やジャンルの範囲は不確定であるばかりか、関連するジャンルの存在などによって、必ずしも明確な定義がなされているとはいえない。ジャンルには多様なアプローチがありその分類も試みられており、分類と整理、それ自体が議論の対象となるなど、音楽のジャンルを定義・限定することは困難である（注7）。本稿では、背景および目的に照らして、世代人口が多く、いまなお社会的影響力を有する「団塊の世代」が、二十歳前後に耳にしていた音楽ジャンルで、なおかつ、世代を超えて歌い継がれる楽曲に着目してフォークソングと称される分野を対象とする。具体的な条件は以下である。①政治・経済・社会など多くの局面において、一時代が終わり次代の始まりをみせた1970年代をひとつの時代画期としてとらえ、DECADE（十年紀）を節目とする1970年から1979年までにリリースされた楽曲であること（注8）。②ご当地ソングの舞台として、タイトルに東京の特定の場所が明示されている楽曲であること（注9）。③調査時点（2024年）で歌い継がれ聴き継がれている楽曲であること（注10）。以上の条件から本稿が特定した対象楽曲を表1に示す（注11）。

『神田川』: 作詞の喜多條忠氏が自らの学生時代の思い出を綴った当時は「軟弱な四畳半フォーク」と揶揄されていた楽曲である（富澤（2007）、BS朝日（n.d.））。現在では、ジャンルを超えて日本のスタンダードナンバーとしての地位を確立している（文化放送（2023））。

『無縁坂』: 子供の手を引き、坂を登る年老いた母の“ささやかな人生”への想いを綴った楽曲である（レコチョク（n.d.））。日本テレビ系ドラマ「ひまわりの詩」（1975年）の主題歌であった（まさし（n.d.））。

『池上線』: 作詞の佐藤順英氏の実話をモチーフに、心に刻まれた別離の情景を、相手の女性に仮託して言葉を紡いだ楽曲である（朝日新聞「be」編集部編（2009））。

『面影橋』: 愛するひと（男）がいるひと（女）を愛してしまった悖乱した男性のリリカルな楽曲である。なお、タイトルに「面影橋」を冠した曲として、ほかに『面影橋から』（作詞：田中信

彦・及川恒平、作曲：及川恒平）（注12）がある。同世代で2曲もの楽曲タイトルに名を戴くほど橋梁名がもつ響きがいかに聴く人の心をとらえ趣があるかを「面影橋」が傍証した至りであろう。

2.2 遍路の実践方法

2024年1月28日から1月30日までの3日間、フォークソングの場景を巡る遍路を実践した。歌詞に映し出されている場所・光景を探索のうえで、歌詞の内容の場景を確認した。なお、本稿で引用している「歌詞：～」は、場所や場景を特定するために解釈を加えて記載されている点に留意されたい。

3 結果

川、坂、駅、橋を巡った結果を以下に記する。

[神田川：巡礼日2024年1月28日および2024年1月29日]

神田川は、三鷹市の井の頭恩賜公園の井の頭池を水源とし台東区柳橋で隅田川に流れ込む全長約26kmにおよぶ一級河川である（帝国書院編集部（2013年））。「歌詞：ふたりで行った横丁の風呂屋」は、帝国書院編集部（2013年）によれば、（旧）戸塚二丁目の『加増湯』、『原の湯』、戸塚一丁目の『安兵衛湯』とされている。地図に記されている『安兵衛湯』（跡）を訪ねた。『安兵衛湯』（新宿区西早稲田3丁目4番8号）は、廃業後マンションとなっていた（写真1）。「歌詞：三畳一間の小さな下宿」は、帝国書院編集部（2013年）によれば、神田川に架かる戸田平橋と源水橋の間の神田川右岸に位置するとされている。戸田平橋と源水橋の神田川沿い（写真2）を訪ねた。神田川沿いに「小さな下宿」を発見することはできなかった。なお、歌碑（写真3）も存在する。歌碑は中野区の末広橋（写真5）の袂の桃園川緑道（中野区中央1丁目13番9号）に設置されている。歌碑右横には「中野区認定観光資源」との案内板（写真4）も設置されており、地域の観光資源であることが確認できる。

[無縁坂：巡礼日2024年1月28日]

無縁坂は、文京区湯島4丁目に位置し、上野不忍池西側（坂下）より旧岩崎邸庭園の北側を通り、文京区本郷7丁目の東京大学鉄門（坂上）（写真6）に至る西に上る（写真7）延長約240mの坂である（坂学会（n.d.））。坂の途中に講安寺がある（写真8）。文京区が設置した坂名標識もあり（写真9）、ここが「無縁坂」であることがわかる。森鷗外の代表作『雁』の作中において、主人公が散歩するシーンとして描写されているほか、文京区観光協会（n.d.）においても「湯島・本郷エリア>観る>坂>文豪」として記されていることから、近代文学との親和性も高い坂として観光資源化が確立していることがわかる。

[池上線：巡礼日2024年1月29日]

池上線は、1922年池上電気鉄道の開業に始まり、現在は、五反田と蒲田の15の駅を結ぶ東急電鉄株式会社9路線のうちの一路線で、沿線には名所、旧跡（池上本門寺や洗足池など）がある（東急（n.d.））。2018年10月には、「池上線全線祭り」が開催され、「1976年のヒット曲「池上線」を歌った」歌手西島三重子さんがイベント列車のガイド役をつとめるなど、そのコンテンツ（曲「池上線」）はすでに地域資源となっている（東京急行電鉄（2018））。「歌詞：隙間風が吹き込む古い電車」は、朝日新聞「be」編集部編（2009）によれば「東急デハ3655」と推察される。調査時点（2024年1月）で運行されている電車は、1000系および7000系（写真10）である（東急（n.d.））。

「歌詞：池上線が走る街/池上線に揺られて女性が帰る街（駅）」は、池上駅（写真 11）であることが、朝日新聞「be」編集部編（2009）にてわかる。さらに、「歌詞：角のフルーツショップ」が、ファストフード店となっていることも、朝日新聞「be」編集部編（2009）にてわかる。「角のフルーツショップ（跡）」（ケンタッキーフライドチキン池上店（写真 12））は、「池上駅前通り商店会」に立地する店舗である。「歌詞：商店街を通り抜け渡った踏切」において商店街とはこの「池上駅前通り商店会」を指し商店街を西進しひとつめの交差点を左折してすぐの踏切が「千鳥町 5 号踏切」（大田区（n.d.））（写真 13）と推察される。以上のように、池上線は、「都会のローカル線」（日本経済新聞社（2017））としてその存在が多面的多角的に注目されており、地域および鉄道事業にとっては極めて有用な観光資源であることがうかがえる。

〔面影橋：巡礼日 2024 年 1 月 29 日〕

面影橋は、新宿区西早稲田 3 丁目に位置する神田川にかかる新宿区が管理する橋梁である。構造美や機能美など橋梁美の表象を感じることが少ない小橋（写真 14）であるが、「面影橋の由来」を記した案内板（写真 15）があり、江戸の昔から伝説が残る由緒ある橋であることがみてとれた（新宿観光振興協会（n.d.a））。さらに、橋梁およびその周辺は、観光コース（早稲田エリア）「桜の名所と歴史を訪ねる春におすすめのお散歩コース」に登録されている。「神田川桜並木」の案内板（写真 16）が設置されるなど、当地はすでに新宿区の観光スポットのひとつとして認知されていることもうかがえた（新宿観光振興協会（n.d.b））。

フォークソングの场景遍路の結果、以下の含意をえた。歌詞に描かれている場景がいまなお残されている場合と、時間の経過によって、当時の場景が残されていない場合を知ることができた。特別な資産価値がある場合を除き、都内における川、坂、駅、橋をコンテンツツーリズムの一部として観光資源化することは容易ではない。しかしながら、それらの地域資源に加えて、各地域に縁のあるフォークソングが歌い継がれることによって、その観光資産価値が高まる可能性はある。街が、ご当地ソングを観光資源として活用する場合、地域の公園整備などとともに歌碑や碑文銘を建立することは、遺産価値を高める有効な手段となろう。さらに、これらの施策は、コンテンツツーリズムにおいて巡礼のファンに対しての観光資源に関する貴重かつ重要な情報発信となる。

4 おわりに

本稿では、フォークソングに謳われている東京の場景としての、川、坂、駅、橋を巡った紀行を紹介した。街の変遷をたどることによって、東京の街に流れているときの遷移を体現し、コンテンツツーリズムにおけるご当地ソングの観光資源化を再考する契機とした。本稿によって以下の結果をえた。1970 年代から現在（2024 年）に至るまで 50 年以上のときが経過していることから、東京という街の変貌とともに、歌に謳われている場景としての当時の面影を偲ぶことは困難であった。場景が残されているとすれば、それは、もはや歌のなかに叙景として存在するのみであることを今回の紀行によってあらためて理解した。ただし、歌碑や碑文銘などの設置によって、コンテンツの遺産価値を高める可能性が残されていることも確認できた。今後は、フォークソングに謳われている空間や場を巡る東京の街歩きの旅が、一時のブームで終わることなく、その場景が後世に遺すべき地域資源としてとらえられ、ご当地ソングが今後も当該地域に根差す方策を模索していきたい。最後に、当時の多くの若者が、東京の場景になぜ心惹かれたのかを述べて結

語とする。当時、さまざまな場面で闘いの勝者となった地方の若者が目指し辿り着く場所が首都東京であった。逆説的にいえば、向都離村の指向のもと都で生活することが勝者となりえた証でもあった。そしてその都に向かう大きなきっかけとなったのが、地方で聴くフォークソングの歌詞に描かれている川、坂、駅、橋のある東京の场景であったと考える。

注

注1) 「団塊の世代」とは、1947（昭和22）年から1949（昭和24）年生まれの日本の年齢別人口において最も層の厚い世代である（厚生労働省（2022年））。その命名は、堺屋太一に因るものである（福間（2015））。一方で、国勢調査分析が五歳階級別で整理されていることから、その前後の一年を加えた世代（1946（昭和21）年から1950（昭和25）年）を広義に「団塊の世代」ととらえる場合もある（上野（2005））。

注2) 「団塊の世代」は、「全共闘世代」と同義語で併用される場合がある。社会変革を夢見て活動し、その後、高度成長期を走り抜け、戦後の一時代を切り拓いた世代である（小阪（2006））。

注3) 1960年代の後半より反体制的思想を持つフォーク・シンガーの一群が出現する。大阪や京都に拠点をもつ関西フォークである。彼らの曲は、市民運動や学生運動のなかで歌われることも多かった（森田（2012））。フォークソングの歴史および定義については、棚田ほか（2011）、山田（2010）が詳しい。

注4) 小泉（2011）も指摘している。1970年代には、演歌、歌謡曲（J-POP）、アニソンなどのあらゆるジャンルにおいて名曲が生まれ時代を彩ってきた。なかでも、全盛期を迎えたのがフォークソングである。レコード売り上げにおいては、吉田拓郎の「旅の宿」、南こうせつとかぐや姫の「神田川」などが、フォークソングのシングル盤として大ヒットを記録する。さらに、1974年「襟裳岬」（作詞：岡本おさみ・作曲：吉田拓郎・歌：森進一）が第16回日本レコード大賞受賞、1975年「シクラメンのかほり」（作詞作曲：小椋佳・歌：布施明）が第17回日本レコード大賞受賞と続く。まさに1970年代はフォークソングの時代であった（東洋経済新報社 online（2020））。

注5) 「駅」と表記するが、駅単体ではなく路線、沿線を含む鉄道を広義にとらえる。

注6) 荒井由実（松任谷由実）のような新しいタイプの日本のポップスを形容する言葉として、ニューミュージックという言葉が使われはじめたなど、その発祥には諸説ある（東洋経済新報社 online（2020））。

注7) 音楽のジャンルは、共通の音楽様式をもった曲をあらわす言葉として第三者から命名されたものではなく、音楽のジャンルを位置付けてその特徴を説明することが難しいことを水戸（2007）が指摘している。さらに、遠藤（2014）においても、音楽のジャンルとは必ずしも絶対的な形式として静的に理解されるものではないことを説いている。

注8) 10年という期間を一言で言い表すことは不可能である。しかし、1960年代は政治の季節として語られることがある。一方、1980年代は、経済のグローバリゼーションとプラザ合意に端を発するいわゆるバブル経済の形成時期であった。これら両時代に挟まれた1970年代は、高度経済成長の終焉とオイルショックの時代であった（常盤政治（2005）、日高（2022））。そして、その1970年代は、「フォークソングの季節」とも称される（朝日新聞出版（2023））。

注9) 団塊の世代が社会に与えたインパクトとして、大学への進学率の上昇にみられる高学歴化

および進学ならびに就職時の三大都市圏へ人口の集中があげられる（内閣府（2008））。すなわち、高度経済成長期に、進学および就職を迎えた団塊の世代の進学率および就職率の高まりは、同時に、都市への転入率を上昇させた（梅溪（2015））。特に、東京圏への一極集中が著しい（伊藤（2006））。なお、東京志向は、この時期にはじまったわけではない。明治期の日本においても、近代化のシンボルとしての聖なる都、帝都東京は、地方の居住者にとって憧れの都市であった。以降、「東京の学校」、「東京の大学」は、若者たちが人生の夢を叶えることのできる修業の場となる（斎藤（1999））。以上をふまえ、本稿では、明治期より現在に至るまで、向都的上昇志向の形成対象としての都「東京」に注目する。

注 10) 奥山（2021）、自由現代社編集部（2023）がある。最近年発行および刊行のこれらの媒体には、本稿で場景通路の対象とした『面影橋』（N.S.P）、『神田川』（かぐや姫）、『無縁坂』（グループ）、『池上線』（西島三重子）のいずれも所収されている。

注 11) アルバムに収録された曲をシングル曲としてリリースする「シングル・カット」のほか、アルバム発売前にシングル曲をリリースする「先行シングル」がある。また、他の歌手の楽曲を歌唱、演奏して発表するカバー曲がある。さらに、作詞作曲者が、他の歌手への楽曲提供後、自ら歌唱、演奏するセルフカバー曲もある。音楽メディアの場合、インターネット配信が主流となっている現在では、発売を含む発表として「リリース」と称する場合が多い。本稿が扱う楽曲内容も多岐にわたることから、情報の統一を図るため、ジャパン・ミュージックワークス（n.d.）を参考に、シングル曲としてリリースされた曲データ（曲名、作詞、作曲、編曲、歌唱、リリース）を対象とする。

注 12) 作詞および作曲の及川恒平氏は、当初、面影橋の所在地を知らぬまま曲を創作している。そのほか日影橋は劇作家の想像によるものであることなどを自身の Web サイト（及川（2012））にて言明している。すなわち、特定の場所を舞台とせずによくがフィクショナルな表象といえる。面影橋に対するイメージが逆に膨らむ結果となっており、男唄でも女唄でない及川ワールド全開といえよう。

【引用文献】

- 朝日新聞「be」編集部編（2009）『うたの旅人』朝日新聞出版。
 朝日新聞出版（2023）『戦後昭和クロニクル：あの時代へホップ、ステップ、ジャンプ』朝日新聞出版。
 奥山清（2021）『青春のフォーク 100：初心者でも久しぶりでも安心！：1972-1979』全音楽譜出版社。
 小阪修平（2006）『思想としての全共闘世代』筑摩書房。
 自由現代社編集部（2023）『魂のフォーク・ソング大全集』自由現代社。
 帝国書院編集部（2013）『歌がつむぐ日本の地図（旅に出たくなる地図シリーズ 8）』帝国書院。
 富澤一誠（2007）『フォーク検定 - フォーク自慢度チェック！320 問 - 』ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス。
 日高勝之（2022）『1970 年代文化論』青弓社。

【引用サイト】

- BS朝日 (n.d.) 「SONG うたの旅人 > バックナンバー > 神田川」 (<https://archives.bs-asahi.co.jp/uta/prg012.html>) [2023年9月1日参照].
- 伊藤薫 (2006) 「団塊の世代の"住まうかたち" - 団塊世代の人口移動の過去・現在・未来 - 」『Review of economics and information studies』6 (3・4)、pp.23-52 (file:///C:/Users/user/Downloads/s/KJ00004107591.pdf) [2023年9月1日参照].
- 上野真也 (2005) 「団塊世代の特性とその影響」『熊本法学』108、pp.75-111 (<https://kumadai.repo.nii.ac.jp/records/25516>) [2023年9月1日参照].
- 梅溪健児 (2015) 「進展する東京集中と経済成長の特徴」『学術の動向』21 (1) pp.18-23 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/21/1/21_1_18/_pdf) [2023年9月1日参照].
- 遠藤薫 (2014) 「音楽ジャンルの嗜好は何によって決まるか: 2014年3月インターネット全国調査より」『学習院大学法学会雑誌』50 (1)、pp.7-27 (file:///C:/Users/user/Downloads/hougakukai_50_1_7_27.pdf) [2023年9月1日参照].
- 及川恒平ホームページ (2012) 「面影橋から」 (https://kohe1.sakura.ne.jp/koheblog/genohanashi/entori/2012/2/12_mian_ying_qiaokara_zuo_ci_tian_zhong_shen_yanji_chuan_heng_pingzuo_qu_ji_chuan_heng_ping.html) [2023年9月1日参照].
- 大田区 (n.d.) 「道路台帳平面図」 (https://www.city.ota.tokyo.jp/dourodaicho/genkyoheimenzu/83/PC-Mapping_83067.pdf) [2023年9月1日参照].
- 小泉恭子 (2011) 「ポピュラー音楽から考えるメディア文化研究: フォーク酒場のフィールドワークを糸口に」『マス・コミュニケーション研究』78、pp.61-80 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/mscom/78/0/78_KJ00007018361/_pdf/-char/ja) [2023年9月1日参照].
- 厚生労働省 (2022) 「令和4年版厚生労働白書 (令和3年度厚生労働行政年次報告) 厚生労働省-社会保障を支える人材の確保-」 (<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/21/dl/zentai.pdf>) [2023年9月2日参照].
- 交通新聞社 (2023) 「いまどきの街って、男女の“別れ話”には不向きな感じかも〜西島美恵子『池上線』『池上線ふたたび』【街の歌が聴こえる／東急池上線編】」 (<https://san-tatsu.jp/articles/248449/>) [2023年9月1日参照].
- 斎藤毅 (1999) 「近代化の装置としての東京-地理空間システム論の試み」『新地理』47 (1)、pp.28-35 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/newgeo1952/47/1/47_1_28/_pdf/-char/ja) [2023年9月1日参照].
- 坂学会 (n.d.) 「無縁坂 (むえんざか)」 (<http://saka.extrem.ne.jp/profile/bunkyo/muenzaka.html>) [2023年9月1日参照].
- ジャパン・ミュージックワークス (n.d.) 「@ELISE (アットエリーゼ)」 (https://www.at-elise.com/Music/about_jmw.html) [2023年9月1日参照].
- 新宿観光振興協会 (n.d. a) 「面影橋」 (https://www.kanko-shinjuku.jp/spot/c006/article_325.html) [2023年9月1日参照].
- 新宿観光振興協会 (n.d. b) 「春におすすめのお散歩コース (面影橋ほか)」 (https://www.kanko-shinjuku.jp/course/-/article_1412.html) [2023年9月1日参照].
- 棚田輝嘉・山内博之 (2011) 「フォークソングの形態素解析: 関西フォークと一般フォークの比較」『実践國文學』80、pp.22-51 (file:///C:/Users/user/Downloads/KJ00007524800.pdf) [2023年9月

- 1日参照].
- 常盤政治 (2005)「長期平成不況の性格とそれに関する若干の経済学的概念の謬見」『三田学会雑誌』97 (4)、pp.639-662. (file:///C:/Users/user/Downloads/AN00234610-20050101-0177.pdf) [2023年9月1日参照].
- 東急 (n.d.)「池上線」(https://www.tokyu.co.jp/railway/data/train_line/ik.html) [2023年9月1日参照].
- 東京急行電鉄 (2018)「“お祭りは続くよ、どこまでも”「池上線全線祭り」開催します！」(<https://www.tokyu.co.jp/image/news/pdf/20181030-2.pdf>) [2023年9月1日参照].
- 東洋経済新報社 online (2020)「東洋経済 ONLINE：フォークソングを愛する人に甦る全盛期の記憶 社会現象には背景があり、歌にも行程があった」(<https://toyokeizai.net/articles/-/372930?page=2>) [2023年9月1日参照].
- 内閣府 (2008)「高齢社会白書 平成20年版高齢社会白書 (全体版) 第1章第1節6 (3)「団塊の世代」が社会に与えたインパクト」(<https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2008/zenbun/html/s1-1-6-03.html>) [2023年9月1日参照].
- 日本経済新聞社 (2017)「「都心のローカル線」活性化、街の情緒で 東急池上線」(https://www.nikkei.com/article/DGXLASDZ06HKM_W7A900C1000000/) [2023年9月1日参照].
- 福岡健二 (2015)「団塊の世代の文学/Literature of the “dankai” Generation」『Asian Studies』3 (1)、201-221 (<https://journals.uni-lj.si/as/article/view/3092/3353>) [2023年9月1日参照].
- 文化放送 (2023)「「あの歌詞は僕が勝手に…」南こうせつが“神田川”作詞家の最後のお見舞いで告白したこととは？」(<https://www.joqr.co.jp/qr/article/80392/>) [2023年9月1日参照].
- 文京区観光協会 (n.d.)「無縁坂」(<https://b-kanko.jp/spot/390>) [2023年9月1日参照].
- まさし (n.d.)「無縁坂/グレープ」(<https://masasingtown.com/musics/7657>) [2023年9月1日参照].
- 増淵敏之 (2007)「地域ブランドにおける補完財としてのご当地ソング」『関東都市学会年報』9、pp.40-50 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/ksurb/9/0/9_40/_pdf/-char/ja) [2023年9月1日参照].
- 水戸博道 (2007)「現代の若者と J-POP」『音楽教育実践ジャーナル』5 (1)、pp.116-125 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjomep/5/1/5_116/_pdf/-char/ja) [2023年9月1日参照].
- 村木伊織 (2012)「アイドルコンテンツをきっかけとしたツーリズムに関する一考察」『Savage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』8、pp.82-87 (https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/49170/1/Sau8_008.pdf) [2023年9月1日参照].
- 森田健司 (2012)「関西フォークの思想的考察-岡林信康とボブ・ディラー」『大阪学院大学経済論集』26 (2) (file:///C:/Users/user/Downloads/%E6%A3%AE%E7%94%B0%E5%81%A5%E5%8F%B8.pdf) [2023年9月1日参照].
- 山田晴通 (2010)「新聞記事データベースにみる音楽ジャンル名としての「フォーク」概念の定着過程」『コミュニケーション科学』32、pp.157-190 (<https://repository.tku.ac.jp/dspace/bitstream/11150/254/1/komyu32-09.pdf>) [2023年9月1日参照].
- レコチョク (n.d.)「無縁坂」(<https://musicstore.auone.jp/s/song/S1004279807/>) [2023年9月1日参照].



写真1 ふたりで行った
横丁の風呂屋のあった場所
〔神田川〕



写真2 戸田平橋より三疊一間の
小さな下宿のあった付近を望む
〔神田川〕



写真3 神田川歌碑
〔神田川〕



写真4 中野区認定観光資源案内板
〔神田川〕



写真5 末広橋より神田川を望む
〔神田川〕



写真6 無縁坂坂上
〔無縁坂〕

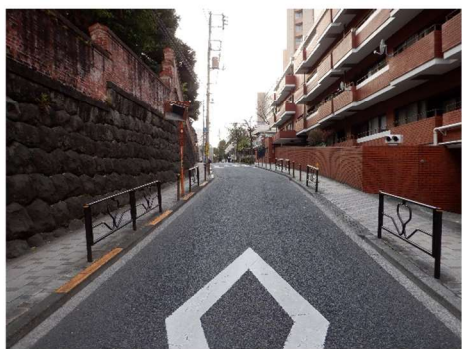


写真7 無縁坂途中より坂上を望む
〔無縁坂〕



写真8 講安寺
〔無縁坂〕



写真9 無縁坂坂途中の坂名標識
〔無縁坂〕



写真10 池上線電車
〔池上線〕



写真11 池上線池上駅
〔池上線〕

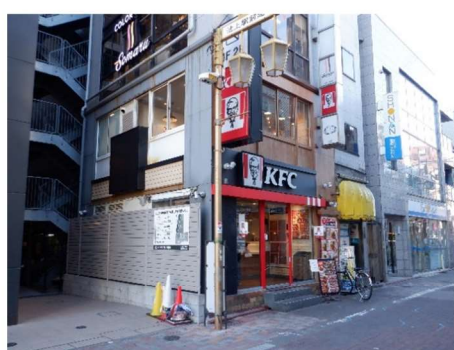


写真12 フルーツショップ
のあった場所
〔池上線〕



写真13 踏切
〔池上線〕



写真14 面影橋
〔面影橋〕



写真15 面影橋の由来を記した案内板
〔面影橋〕



写真16 面影橋横の
神田川桜並木の案内板
〔面影橋〕

(2024 年 7 月 17 日受理)